

彼は来って 我と一体になりたもう

宇宙のまん中、一切衆生の生きる地上、そこに私が念しかし、合掌して生きている。限をつぶつてじつと心眼をみひらいていると、だんだんと色々なことが頭に浮んで来る。何という不思議だろうかなあ。私には、摩訶不思議と言えば私が今こうして生きていることより外に、これより不思議はない。不思議を通り越して、神秘、莊嚴を感じさえする。私は私の生に対して、つきない礼讃さえしたい気がする。

もと仏とは、私と縁もゆかりもない唯尊いお方であった。人間と蟻とが一段、人間と仏とが五十二段、と説教師から聞かされる。五十二段の仏、その高い、考えも何も及ばないほど私とかけはなれた仏は、決して私のこの小さい魂に関係のあるものではない、と思つた時代があつた。けれどもそれは全くの私の愚さがさせることであつた。

彼の無量寿、無量光の覚体たるみ仏は、私が南無したる時、我と一体になりたまい、一体たることに目覚めた時に、私は南無したのである。光は我に來りたもうてあつた。私は、忘るるまま、思い出したいとも考えないまま、有難くもないまま、何も知らぬまま、泣くまま、笑うまま、腹立つまま、彼のみ光と一体であります。まことに如来は、我と不二不異、一体にて生きたもう。

「諸仏如来は是れ法界身なり。一切衆生の心想中に入りたもう。是の故に汝等心に仏を想する時は是の心即ち是れ三十二相八十随形好なり。是の心作仏す。是の心是れ仏なり。」(觀無量寿經)

「是心作仏というは、いう心は心よく作仏するなり。是心是仏というは、心の外に仏ましまさずとなり。譬へば火木より出でて火木を離るることを得ず。木を離れざるをもつての故に、則ち能く木を焼く。木火のために焼かれて木即ち火となるが如し。」(論註)

我地上苦に悩む時、そこに仏白熱して苦の内に大悲を憶念せしめたもう。我地上の制約に囚われて苦しむ時、「慶哉」の涙のままの微笑を与えたもう。我業苦に緊縛せられて自由を失うの時、絶対自由の仏地に魂を蘇らせたもう。ああ如来の大悲なくては一日も生き得ぬ我である。

私は神に祈らなくてもよい。滅罪のために懺悔しなくともよい。私の生命の問題について何のはからいもいらぬ。私は自然にはからわれ、ひかれている。私は何も頼りにしない。たのみにしないままに生きて行かれる。そのまま何をもたよりにしないでもいいところに、大悲と一体のうれしきがある。

私が仏にひしとすがりつくのでなくて、大悲が我に燃えつきたもうてある。私の安心はそこにある。この故に我は、何物をもたよらず、生ききつて行く所、そこにお浄土へのはからいがある。

辻占を見ることもいらぬ。九星判断にも用事がない。八卦も私の世界には用事をなさぬ。予言者も不必要だ。稲荷もいらぬ。お大師もいらぬ。薬師棲も胡子大黒福の神も、私の世界には用事がない。吉日と凶日もない。来る日来る日がお浄土への吉日である。我が生きてゆく前には、善もほしからず悪もおそれず。ただ尊きものは我が生命のみである。我が全体これ南無阿弥陀仏にならせたもう。

地上に生れ出でて来たことの神秘、何者にもくらべる者のない尊厳な我であることに、裏書をつけたもう。その全体に解決をつけたもう。仏を信じ、仏と一体になることによつて、その全てが解決して、最も尊厳なる時として、大地の上にひれふして生きてゆく。

「称仏六字というは、南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。即嘆仏というは即ち南無阿弥陀仏をとなふるは、ほめたてまつることばになるとなり。また即懺悔というは、南無阿弥陀をとなふるは、すなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するにまをすなり。即発願廻向というは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなわち安樂浄土に往生せんとおもふになるとなり。一切善根莊嚴浄土というは、阿弥陀の三字に、一切善根をさめたまへるゆへに、名号をとなふれば浄土を莊嚴するになるとしるべしとなり。智樂禪師、善導をほめたまへるなり。」(尊号真像銘文)

念仏生活の前には何物もなかつた。何物も用事がなかつた。念仏生活それ自身が眞実生活であり、それ自身が懺悔の生活であり、お浄土への生活であり、お浄土を莊嚴する生活であつた。

議論の世界ではてんでものにならぬことが、信仰の世界では無理なところがなく表れて来ます。

「我はもつと幸福でなければならぬ」それが生きてゆく唯一の信条である人、そしてそのために、物質と名誉と地位と愛とを、貪婪の狼のように求めて行く人たちの生活は、力の生活である。自分を主張する議論の生活である。けれどこの生き方は、虹を見て走る空想の日暮しである。「私はもつと幸福であるべきはずのものだ。」こうした強い宣言の前には、生きた胸一ぱい充たされた幸福はあり得ない。こうした人は与えられたものを見出す目が盲になつて、全てに祈り、全ての神に御利益をねだり、そうして底知れぬ迷いに出かけなくてはならぬ。

彼らの目には、不具に生れた人が「私はこんな不具者に生れなかつたら、こうした私故に悩んで下された大慈大悲の親様を、知らせて下さることは出来なかつたのです。この体も、お浄土ではみ仏同様の、お悟りが開かして頂けます。」と喜んでいる人たちの世界は、ちつとも味わうことは出来ないのです。

「私はどうした幸者でございましょうか。」と常によろこんでいる貧しいお婆あ様があります。お婆あ様の七十幾才の顔は、健やかに紅味をおびて輝いています。お婆あ様にはお子様もないのです。たった一人のお婆あ様に、淋しいことはありませんかと問いましても、「いいえ淋しいことはありません。朝も晩もみ仏様と御一緒に暮

しているのをごいいます。」とお答えになります。おばあ様は御恩々々と言うております。おばあ様は求めてかかる人でなくて、受入れて行く人であります。受入れて行く者にだけ感謝があるのです。おばあ様はいつもニコニコしています。元気なおばあ様は冬でもおこたに寝ないで、どんな寒い時でもコツソリ衣服をぬいで、それを自身の上になげかけて、その上に布団を着てねるのです。毎日薪をたいて、出来た火は火消壺に入れて炭にして、御開山様の御逮夜の通夜の時、近所の会館でたくために御報謝していられます。

誰かがこのおばあ様のために、畳を六畳ほど差し上げられました。おばあ様は有難いとよろこんでいられます。世には畳六枚の上に寝る幸福よりも、もつとたくさんなものを与えられていても、感謝して暮し得ない人が大部分であります。近頃その地方には道路がつきはじめました。おばあ様はお慈悲に統べ括られたよろこびの中に、この道路さえ御恩の味にかわつています。おばあ様には有難いことの一つであります。道路をつけるためにおばあ様の畑の一部分は、御報謝の名によつて使われます。おばあ様には世間一切皆仏事であり、「有難い」「勿体ない」「御報謝」等の言葉によつて、毎日々々がつづられています。おばあ様は円ましかなるよろこびにむせんでいるお浄土の民であります。求めて行くかわりに、受入れて感謝する人であります。人生のどん底に光と生命を見出した人であります。

こうした事實は、おばあ様の上に来て自分をあらわしたもうみ仏の輝きであります。人間業で作ることの出来る風光ではなくて、恵まれた魂の上に開けて来る価値世界の顕現であります。「俺はもつと幸福であつてもいいはずだ。」と権利の主張に目を暮している人たちの上にも、ちょうど太陽が如何なる醜い者の上にも照るように、全ては過分に与えられているけれど、「求めて得た」と誤り、「求めてしかも与えられぬ」と愚痴つていたために、こうした心眼を閉じているのでありましょう。こうしたおばあさんの生活態度は、議論の世界では馬鹿らしいことでありましょう。けれども人間が幸福に生きるということは、断じて「俺はもつと幸福であつてもいいはずだ」という、そこには生れては来ませぬ。

「それ菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静おのれにあらず、出沒かならずゆえあるが如し、恩をしりて徳を報ず、理よろしくまづ啓すべし。また所願かるからず。もし如来威神を加へたまはずば、將に何をもつてか達せんとする。神力を加へたまはんことを乞ふ。」

生きることの全部を、我の上に来りてはからいたもうみ仏にまかせて、御恩の尊さを見出して、大悲の親に帰すること孝子の父母に対するように、大石蔵之助が殿様の胸に生きたように、行くもかえるも、「出沒かならずゆえあるが如し。恩を知りて徳を報ず」るの生活は、地上でゆるされる最高の生活であります。

最早、働くことも、書くことも、それは決して、「俺はもつと幸福であらねばならぬ」ために何かを求める生活ではなくて、すべては大きな御恩に報ずる報謝であります。手段の生活ではなくして、それ自身、働くそのことが生きた念仏の躍動であります。

「慶ばしき哉。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。ふかく如来の矜哀をしりて、まことに師教の恩厚をあふぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。……ただ仏恩の深きことを念じて人倫の嘲をはず。もしこの書を見聞せんものは、信順を因となし疑誘を縁となし、信樂を願力にあらはし、妙果を安養にあらはさん。」(御本典)

御開山様の前には人倫の嘲は、ただ仏恩の深きことを念いなさることによつて、打ち消されてありました。生活の根本、因、土台は、「信順」でありました。魂の大骨は、たった一つ、仏との間にひらかれた血の通う白道でありました。そうして、人間を地獄へ誘うはずであった疑誘は、信樂を願力にあらはす助縁となりました。信仰は人生の方向転換だと申しますが、人に理解もなく疑われたり誇られたりすると、真赤になつて瞋恚の炎に魂を焼くのでありますが、真実生活においては、信順の因にこの呪わしい疑誘の縁がふれることは、よろこばせて頂く尊い縁にかわつて来ています。

「信樂を願力にあらはす。」嬉しい言葉であります。人生行路に横たわるあらゆる人間苦をとびこえて、願力の白熱したもうまに信樂を深めて行く生活こそ、妙果を安養浄土にあらはすところの菩薩の歩みであります。

大聖釈尊は

「宜しく、各勤精進し、努力して自ら之を求むべし。必ず超絶し去りて安養国に往生することを得ば、横に五悪趣を載り、悪趣自然に閉づ。道に昇ること窮極なし。行き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄て、勤行4として道徳を求めざる。極長生を獲て、喜樂極りあることなかるべし。」

とおおせになります。

全ての中にいて全てを棄て、全てを棄てて全てを得なかつたのは親鸞聖人様でありました。我を救う者は我であります。絶対他力は絶対自力として、自力のままの上に、他力なのであります。

「行き易くして人なし。」「自然のひく所なり。」「世事をすてて。」「そうです。そうです。ほんとの生命に生きるまでは、親もありません。子も駄目です。学問も、事業も、家庭も、財産も、国家も、社会も、人類も、棄ててかかつていいのです。全てを棄てる人にして全てを得るのです。真に人類の恩恵者であった人は、そらごとたわごととして、全てを棄てた人たちでありました。

「必ず超絶し、去りて安養国に往生することを得ば」何という親切でしょうか。「各々勤精進して、努力して自ら之を求むべし。」それがたった一つ救われる方法であります。求めて求めて求めて「悪趣自然に閉づ。」自然とは人間力でないことでありま。み仏のおはからいのことでもあります。重ねて味わいます。自然とは行者のはからいでないことでもあります。私どもの上に大願業力が動く時、大願業力は我になりきりたもうてあります。この力に動かされて、求めて求めて求めて……ああそれが自然のひくところでもあります。

「行き易くして人なし。」この大きなお力をどうして感じないのでしょう。大聖釈尊の熱涙はこの大経の易往而無人の御言葉にこぼつたのではあるまいか。「この上は

念仏をとりて信じたてまつらんともまた棄てんともめんめんのおんはからいなり。」
(歎異抄の二章) の親鸞様の熱涙は、釈尊の易往而無人の御言葉の上に拝せられます。

「前に生れん者は後を導き、後に生れん者は前を訪らひ、連続無窮にして願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがためのゆえなり。」(御本典)
御開山様のこうした念願は、それがすぐみ仏様の御救いが、地上に顕現し、生きて働いて下さる有様であり、み仏様が人の上にあらわしたもう大願でありましょう。

「我が歳きはまりて、安養浄土に還帰すというとも、和歌の浦曲のかたを浪のよせかけよせかけ帰らんと同じ。一人居て喜ばば二人と思うべし。二人居て喜ばば三人と思うべし。その一人は親鸞なり。」

われなくも法は尽きまじ 和歌の浦 あをくさ人のあらんかぎりは」

衆生が大地の上に住む以上、霊と肉とをもった人間が生れて来れば、そこに法蔵菩薩の願心は一緒に生みつけられているでしょう。そうして、救われて仏心を魂の大骨にした人たちは、幾度も幾度もかえり来って、衆生のあるかぎり、「無辺の生死海を尽さんがためのゆえ」に眞実生活を魂の内に開いて下さるのであります。

かくて私は今、かかる尊い念仏を恵まれました。一切の聖者たちの畢竟依たる久遠実成の如来は我に来って、我を生かし、我と一つになりきって、我を提げて、お浄土に運びたもうてあります。そうしてそれはお阿弥陀様、釈尊、諸菩薩、沢山な聖者、御開山様、御同胞御同行、全ての御恩から私の上に恵まれたのであります。

「空、無相、無願三昧。」働かせて貰います。書かせて頂きます。